血友病および慢性血小板障害の実態と治療基準の設定に関する研究

血友病における家庭治療の試み

静岡県立こども病院　血液腫瘍科　　三間屋純一

血友病患者の家庭治療は欧米では既に10年前より施行されており，早期治療にともなう関節障害の予防，患者の自立心の向上など様々な効果が指摘されている。今回，静岡県ヘモフィリア友の会よりの強い要望もあり，昭和53年９月より血友病家庭治療を実施した。

〔対　象〕 昭和56年２月現在当院に登録されている血友病患者は53例（Ａ45例，Ｂ８例）である。このうち21例を実施対象とした。内訳は血友病Ａ20例，血友病Ｂ１例，年令３才～21才，重症度別では重症７例，中等症13例，軽症１例である。

〔実施法〕 21例は表１の選択基準にそったものである。実施に先だって患者およびその家族に対し血友病に関する一般的知識および家庭治療にともなう有効性と問題点につき充分説明し，家庭治療承諾書の提出を義務づけた。静脈注射手技は外来又は入院にて医師又は看護婦の立ち合いのもとに訓練した。手技者は母親10例，患者本人８例，母親と本人の両方によるもの３例であった。使用薬剤はコンコエイト（ミドリ），クリオブリン（日本臓器），ヘモフィル（ハイランド），およびコーナイン（大塚）を用いた。具体的な実施法は表２の如くで出血時における医師への連絡を原則とした。

〔成　績〕 21例中２例が中断した。１例は医師の指示に従わず管理不能となった13才の軽症例で，１例は途中で静脈注射手技が困難となった３才の中等症例である。現在続行中の19例は全例６カ月以上良好に経過している。施行前，月８回以上と出血頻度の高い７例に週２～３回の予防的投与を行ったところ出血は月平均０～３回に減少した。残り12例の出血時投与群では出血回数の減少したもの６例，不変４例，増加２例であった。関節障害は進行例はなく，11例に改善がみられた。通学している16例は全例欠席日数が大巾に減少し，小学児童９例についてみると月平均の欠席日数が施行前の５日から0.9日に減少している。副作用は２例に蕁麻疹，２例に軽度の胸内苦悶の計４回みられたのみである。肝機能異常の悪化，抗体発生などは現時点ではみられていない。以上の結果より表３の如き評価がえられた。

〔結　論〕 血友病家庭治療は専門医の充分な指導のもとに行なえば，血友病患者の早期出血管理に最も有効な方法として推奨される。

表1　血友病家庭治療の選択基準

1. 出血頻度が月４回以上
2. 近医療機関にて適切な治療が受けられない
3. 家族および患者が強く希望する
4. 医師と患者家族との信頼関係が保たれている
5. 当院での定期的経過観察が可能である
6. 抗体の発生がみられない
7. 信頼しうる手技者である

血友病家庭治療対象例
（静岡県立こども病院　1978～1981）

病　　型	血友病A	20例	(45例)
	B	1	(8例)
重　症　度	重症	7	
	中等度	13	
	軽症	1	
施行時年令	5才＞	1	
	6～11	10	
	12＜	10	
出血回数	4回	7	
(月平均)	5～7	7	
	8＜	7	
使用濃縮製剤	コンコエイト	10	
	クリオブリン	9	
	ヘモフィル	1	
	コーナイン	1	
手　技　者	母親	10	
	患者本人	8	
	母と本人	3	
治　療　法	出血時投与	14	
	予防的投与	7	

表2

血友病家庭治療の実施法

1. 出血又は予防的投与時に血液科医師へ電話連絡をとる
2. 出血の程度により第Ⅷ因子製剤の投与量を医師が指示する
3. 製剤投与30分前に抗ヒスタミン剤（ポララミン）の経口投与を行なう
4. 副作用がみられた場合には直ちに連絡する
5. 患者および両親は出血記録をとり後日担当医師へ提出する
6. 2－3ヶ月に1回肝機能，ＨＢ抗原，抗体および第Ⅷ因子インヒビターの検索を行なう

血友病家庭治療の臨床結果（19例）

1）出血頻度

減少	13例
不変	4
増加	2

2）関節障害

改善	11例
不変	8
増悪	0

3）副作用

蕁麻疹	2例
胸内苦悶	2
肝機能異常増悪	0
抗体発生	0

家庭治療にともなう学校欠席日数の推移

（血友病小学児童 9例）

	施行前	施行後
1. 長○	8	0
2. 大○	2	0
3. 広○	4	1
4. 松○	8	3
5. 曽○	3	0
6. 星○	2	0
7. 池○	5	3
8. 池○	10	2
9. 神○	3	1
月平均欠席日数	5日	0.9日

表3 血友病家庭治療に対する評価

患者側

1. ‘痛み’よりの解放
2. 学校への欠席日数の減少
3. 社会的行動範囲の拡大
   遠足，旅行etc. への積極的参加
4. 性格が明るく，活発となる
5. 医療機関への気兼ねが少なくなる
6. 家族の時間的，経済的負担の軽減

医師側

1. 早期治療により出血管理が容易となる
2. 重症関節症への進行防止および予防に効果あり
3. 従来に比し患者家族の血友病に対する理解度が高まる

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

血友病患者の家庭治療は欧米では既に10年前より施行されており,早期治療にともなう関節障害の予防,患者の自立心の向上など様々な効果が指摘されている。今回,静岡県ヘモフィリア友の会よりの強い要望もあり,昭和53年9月より血友病家庭治療を実施した。